北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1998. 7. 10
第20巻2号
通巻146号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

ポアロがいつも描いていた三角形

冬枯れのデボン
湖畔に一台の車が
乗り棄てられていた。

1926年12月5日、
新聞は
「アガサ失踪」を報じた。

大がかりな捜索だった。
100ポンドの懸賞金を出すという新聞社。
自殺説、他殺説が飛び交った。
シャーロック・ホームズのコナン・ドイルまでがアガサの手袋を心霊師に見せて、
「生きている」と騒ぐ有様だった。

その時、
アガサは、デボンの北東、
ヨークシャー州の海岸に近い、保養地、
ハロウゲイト
に居たのである。

宿泊名簿には
「テレサ・ニール」と記入した。
裏切った夫の愛人の名は
ナンシー・ニールだったからだ。

ポアロがよく出くわす怪事件は、
三角形をなしている。

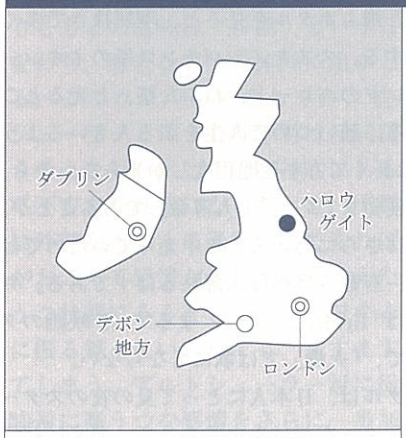
よもや、我が身に、
この三角形がふりかかろうとは?!
母の死と
夫の裏切りと、
二重の苦しみの中にあって、
アガサが取った行動は、
ミステリーそのものであった。

やはり、事実は小説よりも奇なりだったのか？

(関連読み物　p. 6－7)

書彩生彩

―ときには湯けむりのアンダンテ（ゆっくりと）②



ヨークシャーの保養地
ハロウゲイト

■ p. 2．水の話(2)（余湖典昭）　■ p. 3．講壇余滴(1)（後藤啓一）
■ p. 4－5．気楽に読もう　■ p. 8．北海道経済を読もう（K.K.）

水の話 (2)

ホタル

余 湖 典 昭

「ホーホーホタル来い！」で始まる童謡を知らない人はいないだろう。「ホタル来い！」に続く歌詞は、地方によって様々なバリエーションがあるそうだが、約半分は「こっちの水は甘いぞ」に代表される「水」に関する歌詞が続くと言う(南　喜市郎著：ホタルの研究、サイエンスト社)。昔は田んぼや小川など、どこでも見られたホタルだが、都市化が進んで滅多に見られなくなった。

「たかがホタル」かも知れないが、淡い蛍光を発しながらゆっくりと飛ぶホタルを見ると、理屈抜きで多くの人々は感動する。ススキノやパチンコ屋のネオン、ディズニーランドのパレード、ねぶた祭、と光るところに人が集まる。通いつめて人生を誤る人もいるようだが、ホタルは長くても１週間程度しか光らないから、教育的にも大変望ましい。「美人薄命」であることが、日本人の感性にさらに訴える。年中光っていたのでは街灯と同じで、有難みは格段に薄れるはずである。ちなみに英語では「firefly」と言う。まるでSF映画のタイトルのようで、「火蝿」では歌にもならない。

とにかくホタルは、日本人にとって夏の夜のスターである。でもスターなのは成虫であって、発光は結婚相手を見つける大切な営みであり、人間サマに喜んで頂くためではない。縁談が成立すると交尾し、水際のコケの部分に産卵する。これでホタルの一生は終了である。離婚・再婚と忙しいどこかのスターとは違って、実に直向きな一生である。

さて本題に入ろう。何故ホタルに水が欠かせないのか。それは卵から孵化した幼虫が、水中で生活するからである。それはまるで毛虫のようで、成虫とは似ても似つかぬ形をしている。カワニナ、モノアラガイなどの貝を食べながら数回脱皮し、翌年初夏まで水中で成長する。その後上陸し、土にもぐり繭となり、真夏の蒸し暑い夜に成虫となって結婚相手を探すのである。日本ではヘイケボタルとゲンジボタルが代表的なホタルである。ゲンジボタルのほうが個体が大きく光も強いため、人気はゲンジが上回るが、北海道で自生するのはヘイケボタルである。

ホタルがいなくなった理由として、「水が汚れたから」と多くの人が思っている。確かに農薬の使用はホタルに大きな打撃を与えたが、もう一つの要因として、ホタルの生活史に必要な環境が失われたことも見逃すことが出来ない。

どんな生き物も生活史を持っている。生を受けて死を迎えるまでの間、様々な環境を必要とする。人を例にしても、家庭、住居、教育、職場など多くの環境を必要とし、少しでも良い条件に身を置こうと一生もがき続ける。ホタルも、と言うよりもすべての生物が、世代交代を繰り返すためには多様な環境が必要であり、その一部でも失われると種の保存は不可能なのである。川がブロックやコンクリートの護岸で固められると、産卵や上陸場所が失われホタルの自然繁殖は不可能となる。ホタルに限ったことではなく、鳥、魚や虫たちの多くが生息場所を失ってしまった。これは土木技術者に大いに責任があるところだが、遅まきながら最近は生物の生態に配慮した工法が取り入れられるようになっている。市民運動も活発となり、各種の行事を通して啓蒙活動も活発に行われている。しかし一見好ましく思えるこの様な傾向にも、実は落とし穴がある。ホタルを例にすると、成虫の飛翔のみを目的として毎年幼虫の放流を繰り返し、ホタル１頭当たり数万円かかったと言うケースもある。人間の都合を優先し生物環境を破壊してきた反省は大いに結構だが、それを復元あるいは創造するときにも、ターゲットをスター性を持った生物に限定し、またもや人間の都合を押しつけようとする。若い学生諸君にはまだ分からないかもしれないが、自分の人生ほど思い通りにならないものはない。ましてや女房、子供ときたら手がつけられない。それを知りながら、自分と全く異なる生き物を思い通りにしようとする。失敗を繰り返した挙げ句、お尻が電気で光るホタルの像を作ったところもあると聞く。ホタルを養殖するソフトも売り出されるかもしれない。「人間とは、何と欲深いのか」、今年もこう嘆きながら、ホタルは短い生涯を終えるに違いない。

(よご　のりあき　工学部土木工学科教授)

講壇余滴（1）

音楽の心理効果を考えてみると……

後藤啓一

お風呂に入ってしばらくして体が暖まってくると、自然に歌を歌いたくなる。こんな経験は多分だれでもあるだろう。体が暖められることにより血行がよくなり、神経の働きがなめらかになった証拠である。歌うことはストレスの発散になる。歌うことで呼吸がスムーズに行われ、意識していなくとも、結果的には深呼吸をしていることが効能である。何よりも深呼吸は心を和ます基本的な方法だからである。ところで、歌うこともさることながら、音楽を聴くというのもストレス解消のひとつである。歌うことがストレスの発散ならば、音楽を聴くことは、ストレスを鎮静する働きを持つ。

わが国の音楽心理学の権威でもあり、音楽療法を提唱している元東京芸大教授の桜林仁先生は、音楽は〝いたわりのコミュニケーション〟だという。桜林先生の説明によると、音楽には強弱があり、強は心に緊張を引き起こし、弱は反対に緊張を解く。生体には、緊張、弛緩、緊張、弛緩といった反復のリズムがあり、音楽のリズムと呼応したとき、心が安定するという。音楽が人の心をうつというのは、生体のリズムと音楽のリズムが一致したときなのであろう。確かに音楽を聴いているときには、自分でも気づかないで自然に体を動かしたり、手や足でリズムをとっていることがある。さらに音楽は喜びを現し、悲しみを慰め、沈んだ心を力づけてくれる。

音楽の持つこの不思議な力を活用し、快適な気分をつくりだす研究が音楽療法を生み出した。音楽療法とは、音楽による心理療法のことである。心身の健康は多かれ少なかれ、心理的な原因によって影響を受けるので、失われた心のバランスを音楽を応用して回復し修正し、さらに増進するということは考えられて当然である。この考え方の背景にある原理を探ってみよう。

人間の心は、ある感情が一方に片寄ると自律的に元に戻そうとする働きがある。ちょうど振り子が揺れるように、ある程度の振り幅で揺れている。人間の持つ復元力である。この復元力のバランス・パワーが崩れると、さまざまな精神力、肉体的障害が現れてくる。つまり病気である。復元力とは、たとえば暑ければ汗が出て体温を調整するように、刺激が強すぎて緊張が高まると、バランス機能がうまく働かなくなる。自律神経失調症というのは、心身のバランス機能を左右する自律神経が、緊張、緊張の連続で正常に働かなくなった症状だという。

人間はたえず興奮と鎮静の両極を揺れ動きながらバランスをとっている。このバランス調整を支えるしくみが「心理的カタルシス」という現象である。カタルシスは通常〝浄化〟と訳されるが、もともとの意味は〝排泄〟ということである。すなわち、有害なものを体外に出すという作用である。このカタルシスのしくみに基づき、アルトシューラーという心理学者は〝同質の原理〟という考えを打ち出した。精神的にある感情が片寄って不安定な状態になったとき、同質の感情をさらに外部から加えて過剰にしてやれば、カタルシスがおこって感情が逆転すると考えた。たとえば、うつ状態にあるとき、クヨクヨするなとか、陽気に振る舞えといわれても、ますます憂うつになってしまう。アルトシューラー説に従えば、こんな時逆に憂うつな感情をさらに一歩加えてやると、カタルシス現象がおきて気分が逆転、安定したものになると考えられる。この考えが音楽療法のスタートになった。

臨床心理学者ハーマン教授の報告によると、昇進が長い間ストップしたビジネスマンが、他人に対して懐疑的になり、感情が鈍く、無感動になり、うつ状態を呈し、仕事に集中できなくなった。そこで、バッハの「ブランデンブルグ協奏曲」ブラームスの「大学祝典序曲」ハイドンの「天地創造」などを聴かせたところ、4日で憂うつ状態を脱し、周囲のものに対して関心を抱き始め、1週間後にはほぼ正常な状態に戻ったという。この種の研究事例は多い。ただやみくもに音楽を聴くのではなく、音楽の特性と自分の心身の状態を考えながらのほうが効果が上がるということは、音楽を心の健康づくりに活用できることを意味するものであり、自分なりに工夫してみる価値はありそうである。

（ごとう　けいいち　経済学部教授）

気楽に読もう！

「鉄塔武蔵野線」

銀林　みのる著（新潮文庫）

「鉄塔武蔵野線」は第６回日本ファンタジーノベル大賞を受賞した作品です。従来のファンタジーのイメージで本を開くと、意表をつかれます。作家自身による写真があちこちに掲載されていますが、その写真も一見同じような鉄塔ばかりでとうてい読む気になれないと言うのが正直な感想でしょう。しかし、いったん読み始めると不思議な魅力に引きこまれます。主人公は小学５年生の男の子。転校を間近にひかえた夏休み、弟分の小学２年生を従えてひたすら鉄塔を追い武蔵野線をさかのぼって行くというお話です。それだけの物語の中にその年頃の男の子の冒険心、宝物、二人の会話からたがいの表情まで彷彿とさせるほどこまやかに、表現されています。つい、見晴くんの母になりきって心配したり、応援したりしてしまいました。それ程にこの小説が二人の少年の心理状態を適格に表現してあり、こんなに少年の心がわかる著者はいったい何歳でどんな人物なのか知りたくなってしまいます。

夏休みを目前にして、浮かれることなく定期試験の準備に取りくんでいる皆様におすすめするのも気がひけるのですが…

今年の夏休みは勉強とアルバイトだけじゃなく冒険の旅に出たいと考えているあなた。なんだか近頃すっかり少年の心をなくしちゃったなあと、お嘆きの君。ぜひ「鉄塔武蔵野線」の世界に足を踏みいれて見てください。（T．M.）

「メジャーリーグに挑戦する男たち」

池井　優著（NHK出版　1998）

ロサンジェルス・ドジャースのピアッツァ捕手のトレードに始まり、同じくドジャースの野茂投手とマリナーズのジョンソン投手のトレード騒動等、今アメリカのメジャーリーグは各球団の看板選手移籍の話題でもちきりのようです。我々日本人にとって今、最大の関心は話題の中心、元近鉄バッファローズ・野茂投手の移籍先（ニューヨーク・メッツ）での活躍です。しかし、日本でも有名なチームの中心選手をあっさりとトレードしてしまう各球団のトップ、トレード当日に移籍した

気楽に読もう！

チームの試合に出場する選手たちの行動に違和感を感じているのは私だけではないでしょう。アメリカのメジャーリーグは日本の野球と比べてフランチャイズ制が根付いています。メジャーリーグの試合は都市と都市との戦いでもあります。地元の球団の看板選手がある日突然相手側の選手になる、この事実をアメリカのファンはどう感じているのでしょうか？

慶応義塾大学の池井優教授著「メジャーリーグに挑戦する男たち」は、このようなメジャーリーグの現在を伝える格好の入門書です。野茂、伊良部、長谷川がアメリカのファンにどのように受入れられているかを始め、試合中継を更に楽しく見られる話題満載です。

最後にこの本で印象に残った一節、ジム・キャリー主演映画「ライアーライアー」の台詞から…「パパ、野球をやろう。パパはホセ・カンセコ、ボクはノモだからね」

「潜水服は蝶の夢を見る」
ジャン＝ドミニック・ボービー著
河野　万里子訳（講談社）

〝潜水服〟と〝蝶〟、何だか不思議なタイトルに惹かれて、私はこの本を手に取りました。

著者は、世界的なファッション雑誌「ＥＬＬＥ」の編集長だった人です。華やかな世界で活躍していたある日、彼は脳出血で倒れ、20日間生死の間をさまよいます。そして、目覚めた時には全身麻痺の状態、「ロックトイン・シンドローム」とよばれる難病に冒されていたのです。しかし、意識や知能は全く元のままでした。彼は、ただ１ヵ所、かろうじて動かせる左まぶたを使って、コミュニケーションをとり始めます。自分が何か話したい時には、相手に使用頻度順に並べられたアルファベットを読み上げてもらい、表したい文字の所でまばたきをして、単語を組み立てていきます。この本も、そうやって書き上げられました。まばたきを、20万回以上も繰り返して。

〝潜水服〟とは、全く動かない自分の体、〝蝶〟とは、その体から抜け出して、軽やかに舞う心の象徴なのです。彼の思いは、過去と現在、夢と現実の間を、自由に行き来します。

私は、あるがままの自分を見つめ、時に生き生きと、あるいは静かに綴られたこの手記を読んで、大げさかもしれませんが、勇気を与えられた様な気がします。また、改めて言葉が持つ力というものを感じました。

できるだけ多くの人に読んでもらいたい、心からそう思います。（Ｙ．Ｋ．）

朝(あした)に鉱泉を飲めば夕にミステリーを書くも可なり

文豪知求紀行

—続・戦争と平和の世紀みつめて

② イギリス アガサ・クリスティ

温泉を英語では、Hot Spring
つまり、常春の国ということになる。

アガサが汽車を乗り継いで、たどり着いたハロウゲイトは雪の中だった。
朝夕に飲む鉱泉は、アガサの疲れを癒していった。
プールで泳ぎ、サウナに入る。
マッサージを受ける。夕にはコンサート。

映画『**アガサ愛の失踪事件**』では、知り合いになったジャーナリストがある時、アガサの姿が見えない事に不審を抱く。
駆けつけたマッサージ室で、アガサは自ら強い電流を浴びて倒れていた。
懸命の応急措置でようやく甦ったアガサ。

別れの朝、
アガサはジャーナリストに言う。
「私は生きますわ。
新しい恋をするために」。

アガサの決意は本当だった。
彼女はやがて一本の道を見い出し、
その道をどこまでもつき進んで、
ついには幸福の国へとたどりつく。
オリエント特急に乗って行った先に、古代バビロニアの世界があった。

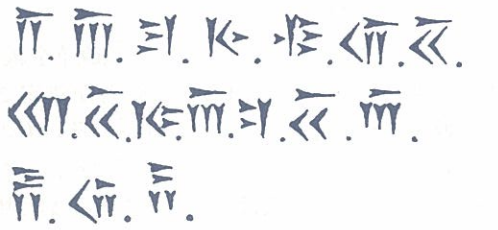
1930年。アガサ40歳。
漱石がそうだったように、
アガサの転機だった。
彼女はオリエントの地で、若き考古学者、
マックス・マローワンと結ばれる。

ハロウゲイトの鉱泉が
彼女に生きる力を与えたかのようだった。
それが、やがてあの名作『**砂に書かれた三角形**』を生み出すことになる。
ポアロが描いていた三角形は、
ハロウゲイトに向かわせたアガサ自身の三角形と同一のものだったろう。

朝(あした)に鉱泉を飲めば、夕にミステリーを書くも可なりなのかもしれない。

青い月の砂漠に モナリザは微笑(ほほえ)み

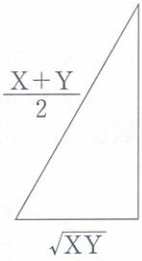
ダリウス、偉大な王、諸王の王



（ローリンソンが解読した碑文の一例）

バビロニア式２次方程式の解法

$X+Y=p$，$XY=q$ のとき



$$\frac{X-Y}{2}=\sqrt{\left(\frac{p}{2}\right)^2-q}$$

ピュタゴラスの定理から「高さ」を得ている。

$$\overset{(斜辺)}{\frac{X+Y}{2}}\pm\overset{(高さ)}{\frac{X-Y}{2}}$$ はX，Yとなるから

求める解は

$$\frac{p}{2}\pm\sqrt{\left(\frac{p}{2}\right)^2-q}$$ だった。

「ユリイカ」。

この言葉こそ、風呂から飛び出して叫んだアルキメデスの言葉である。

I have found it！

「我、発見せり！」。

古代バビロニアの世界に足を踏み入れたアガサにとって、それは日々「ユリイカ」だった。

イギリス考古学探検隊のリーダー、大英博物館所属の碑名学者、レイナード・ウーリー博士は、何よりも古代文明の知恵を楔形文字を通して身につけていた。

「三平方の定理」もしくは「ピュタゴラスの定理」と言われている公式は、実は、ピュタゴラスよりはるか以前の古代バビロニアの人たちの発見になるものだった。彼らは、それを用いて、「２次方程式」の解を楽々と得ていたのだ。(図参照)

それはやがて、中世になり、

カルダノの３次方程式の解の方法ともなり

アインシュタインの「特殊相対論」を形づくった。

ウーリー博士は又、ローリンソン以来の、イギリス考古学の輝かしい伝統について、「アラビアンナイト」を話すごとくアガサに言って聴かせたのだった。

ローリンソンの発見した楔形文字の解読はあのフランスの天才的言語学者、シャンポリオンに比肩されうるだろう、とも言った。

他方で、ウーリー博士夫人のキャサリンはアガサにとってはややっこしい存在だった。

「あの人はユダヤなのよ！」と、語気強く言う時、それはほとんど「あの人は私のものなのよ！」と言っていることと同じだった。

「またしても、三角形！」。

内心、アガサは途方にくれたが「恋の方程式」を解いて、彼女は結婚した。

彼ら夫妻は、あたかも「トロヤの夢」を掘り当てたシュリーマン夫妻のようだった。

1938年の『**メソポタミア殺人事件**』の中でキャサリンは殺される運命にあった。

アガサは青い月の砂漠に微笑(ほほえ)むモナリザだったのかもしれない。

「北海道経済」を読もう……『構造転換と創造的未来』へのご案内

日本経済新聞社編　□『漂流する北海道 ── 深まる経済自立への苦悩』(1997 年)
北海道新聞社編　□『逆風を超えて ── 拓銀破たんと北海道経済』(1998 年)
毎日新聞北海道報道部編　□『破綻 ── 北海道が凍てついた日々』(1998 年)

「今、21 世紀を指呼の間とする日本は、国際社会での生き残りをかけて明治維新、第二次大戦での敗戦と並ぶ大きな構造転換を迫られています。冷戦終結後に不確実性を増した内外の情勢下で、日本の従来の政治・経済・社会システムは機能不全に陥った感があります。……こうした潮流の変化に『島国の中の島』である北海道は翻弄され、羅針盤を失った船のように漂流しています」(『漂流する北海道』)。

「北海道にとって 1997 年 (平成 9 年) は歴史を画す激動の年だったといえる。善きにつけあしきにつけ、北海道の歴史とともに歩んできた北海道開発庁と北海道拓殖銀行がその歴史の舞台から姿を消すことになったのが、その象徴的な出来事であろう。言葉を替えると、明治開拓以来、北海道の特性を色濃く映してきた「開発」と「拓殖」の二文字が消えることでもある。まさに、北海道にとっては歴史的な転換期といっても過言ではないだろう」(『逆風を超えて』)。

「拓銀の破綻に前後して、北海道では重大ニュースのラッシュが続いた。12 月 16 日には、拓銀がメーンバンクの北海道最大手の老舗百貨店『丸井今井』で、……社長が解任され、経営危機が表面化した。……この年の夏、政府の行政改革会議で、北海道開発庁の国土交通省への統合が決定された。戦後の北海道を支えた『枠組み』そのものが音を立てて崩れ始めた。その中で歴史を誇った中核的企業も、ある企業は消滅し、ある企業は抜本的再建を迫られた」(『破綻』)。

以上は、昨年末から本年 5 月にかけ、相次いで出版された「北海道経済の現状と可能性」についての書物の「まえがき」「プロローグ」の一部分です。

周知のように北海道は、遠く幕末期には「蝦夷地警備」のために幕府直轄地として経営され、明治維新以降から終戦直後までは「北海道開拓使」や内務省管轄の「北海道庁」を中心とした「国策」によって開拓が行われてきました。このような流れは、地方自治の進展があったにもかかわらず、戦後においても大筋では変わりませんでした。それは北海道開発法の制定による「北海道開発庁・開発局」の設置とその下での「開発事業」の展開を見れば明らかです。

「未開の新天地」「可能性の大地」「国民経済再建のホープ」などの言葉を「冠」とした北海道は、国際経済社会と日本経済の急激な変化の中で、これまでの流れに対し、180 度の方向転換を迫られています。これまで官主導で形成されてきたといわれる北海道経済社会の「枠組み」は、どのような創造的な取り組みによって「型枠」が外され、未来を先取りしていくのでしょうか。いずれの著書も明確な答えを「総枠」で用意しているわけではありませんが、その萌芽の指摘についてはうなずける部分が多いようです。皆さんも北海道の未来について色々と考えてみてはどうでしょうか。

(K. K.)

北海学園大学附属図書館報　図書館だより Vol.20 No.2 (通巻 146 号)
本館 〒062-8605 札幌市豊平区旭町 4 丁目 1 番 40 号 工学部図書室 〒064-0926 札幌市中央区南 26 条西 11 丁目
☎ (011) 841－1161 本館内線 270～275・279 工学部内線 813・814 印刷所：㈱アイワード